

日本ユニシスのクラウドはなぜ採用されたのか

—— ICT 最適化を目指す日本ユニシスのクラウドサービス

森 駿

要 約 日本ユニシスは ICT 最適化の No.1 パートナー像を掲げ、お客様の側に立って共に課題を解決する姿勢を貫いている。日本ユニシスのクラウドサービス「U-Cloud」のサービス体系、サービスメニューも同様の考え方で構成している。こうした姿勢と考え方、そして技術・サービスメニューにより、お客様の支持を得ている。

1. はじめに

日本ユニシスの「U-Cloud サービス」は、お客様の要件に最適化した ICT 環境を提供するサービスである。

昨今の情報システム部門は、ICT 技術の多様化や複雑化に追従することができない、ビジネススピードの加速で短縮化された ICT 環境導入のリードタイムに対応することが困難、数年にわたって構築したシステム環境の運用・保守に拘束されるなど、さまざまな課題を抱えている。U-Cloud サービスは、このような課題を解決するために設計から運用・保守まで一貫したサービスを提供し、情報システム部門が抱えている課題の解決を支援している。本稿では、日本ユニシスの提供する U-Cloud サービスがどのように企業の課題を解決しているかを述べる。

2. 企業を取り巻く状況

2.1 経営の課題

現代の日本における企業の代表的な経営課題には、順位に入れ替わりはあるものの、「業務プロセスの効率化」「グローバル化への対応」「営業力強化」「セキュリティ対策」「不要なコストの削減」という項目が常に挙げられる。また、2011年3月の震災以降、特に取り組みが求められる課題として挙げられるのが「災害やシステムダウンへの対応策」である。今後は、少子高齢化による「人材確保と人材育成」、資源の枯渇に対する「エネルギーマネジメント」「新興国の台頭」などに積極的な対応が求められることが予測される。企業はこのような課題に常に直面し、そして対応策を講じながら企業経営を継続、発展させなければならない。

2.2 情報システム部門の役割

情報システム部門の役割は、各種ビジネスライン（＝現場）から発生する課題・要件を、ICT の最適活用により解決することである。情報システム部門は、「世の中のトレンド」「技術の進歩」「コストと効果のバランス」などを念頭におき、解決策へと導くさまざまな素材を企業内外から調達し、それらを組み上げることによってビジネスラインへ提供することが求められている。

2.3 情報システム部門の課題と対応策

ICT 技術の進化に伴い、情報システム部門の業務範囲は図 1 に示すように拡大し複雑化し続けている。また進化のスピードが非常に速いため、常に最新の技術を習得して保持することは非常に困難となっている。さらにせっかく習得した技術もすぐに陳腐化してしまう。

このような課題への対応策として有効となるのが、ICT リソースの外部調達である。つまり今までは必要に応じて購入し自社に設置していた ICT リソースを、所有から利用に切り替えることである。これは課題となっている技術の進化、追従といった分野を専門家（＝ ICT ベンダー）に任せることにより、情報システム部門はそのサービスの利用者の立ち位置になることである。さらに ICT リソースだけではなく、業務の一部をそのまま外部委託する（＝アウトソーシング）手法も有効である。

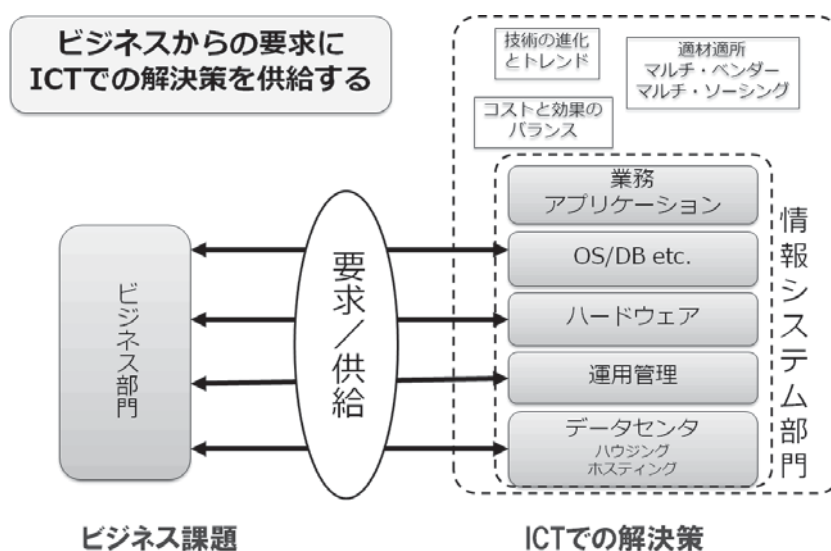


図 1 情報システム部門の役割

3. 日本ユニシスが考える ICT 最適化とクラウドの関係

日本ユニシスグループは、“お客様と共に ICT で「人と環境にやさしい」社会を実現する”ことを使命として掲げ、以下の三つのパートナー像を目標としている。

- 1) ICT の最適化を実現できる No.1 パートナーとなる
- 2) ICT を梃子にお客様に付加価値を提供できるパートナーとなる
- 3) ICT を活用し社会基盤の提供に貢献できるパートナーとなる

これらが意味するところは、単に商材を提供するのではなく、お客様の課題をお客様と共に解決していくことであり、クラウドサービスの提供にもこの考え方が踏襲されている。

この「ICT 最適化」に則した、日本ユニシスが提供する U-Cloud サービスが、企業の経営課題、情報システム部門の課題に対してどのように解決策を提示できるのかを述べる。

3.1 クラウドの本質とは何か

この数年で ICT の一要素として浸透しつつあるクラウドの本質とは何か。それは、①利用

型であることから ICT リソースにかかるコストの最適化が可能となる、② ICT リソース調達までのリードタイムを短縮し、立ち上げまでの時間を短縮できる、③ いままで難しいとされていた企業の枠を超えたデータ連携など、様々な壁を取り除いた新しい付加価値連携を生み出すことができる、ということである。

また、その選択肢としてのクラウドの種類は多様化しつつある。安価で気軽に利用できるパブリッククラウド、自社の用途に特化したかたちで利用できるプライベートクラウドは、IaaS型として提供される代表的な形態である。アプリケーションにおいては、パッケージを購入するのではなく従量課金型で利用できる SaaS 型のものが多数提供されている。また、業種や利用用途に特化した個別のアプリケーション開発については、PaaS といわれるサービスを利用することで個別にカスタマイズされたアプリケーションを SaaS 型で利用することが可能になる。

情報システム部門は、これらの本質を充分に見極めて、最適な箇所に最適なクラウドを適用しなければならない。

3.2 日本ユニシスが提供するクラウドサービス「U-Cloud」

日本ユニシスは情報システム部門の役割と責任を、2.2 節で述べたように「企業の課題を適切な ICT 利活用により解決すること」と考えている。これが「ICT 最適化」である。情報システム部門は、ビジネス要求に最適な解を導き出す為に、ICT リソースや人員リソース、アーキテクチャを最適配置しなければならない。

その効果的な手段の選択肢として日本ユニシスのクラウドサービス「U-Cloud」を位置付けることができる。U-Cloud サービスは、IaaS/PaaS/SaaS から、クラウド導入に関するコンサルティング、大規模なアウトソーシングまで、豊富なメニューをそろえており、様々な顧客課題に対して解決手法を提示することが可能である。本節ではその中の「U-Cloud IaaS」の特徴について記す。

3.2.1 豊富なサービス体系

U-Cloud のサービス体系は、U-Cloud IaaS を中心に構成されており、多くのインフラ構築の選択肢を持っている（図 2）。パブリッククラウド上に簡易にシステムを構成するための U-Cloud IaaS/uSelfCloud、パブリッククラウド上にあたかも専用環境のようなシステムを構築できるエクスターナルプライベートクラウドとしての U-Cloud IaaS、情報システム部門が内部サービスプロバイダとして機能するときに必要なクラウド（＝インターナルプライベートクラウド）を構築できる U-Cloud @IPCP/U-Cloud クラウド環境構築サービス、既存のシステムやどうしても外に出せないシステムをデータセンターに設置するための U-Cloud アウトソーシングなどである。またこれらを組み合わせることによって、ICT 最適化の現実解としてのハイブリッド環境を構築することが可能である。

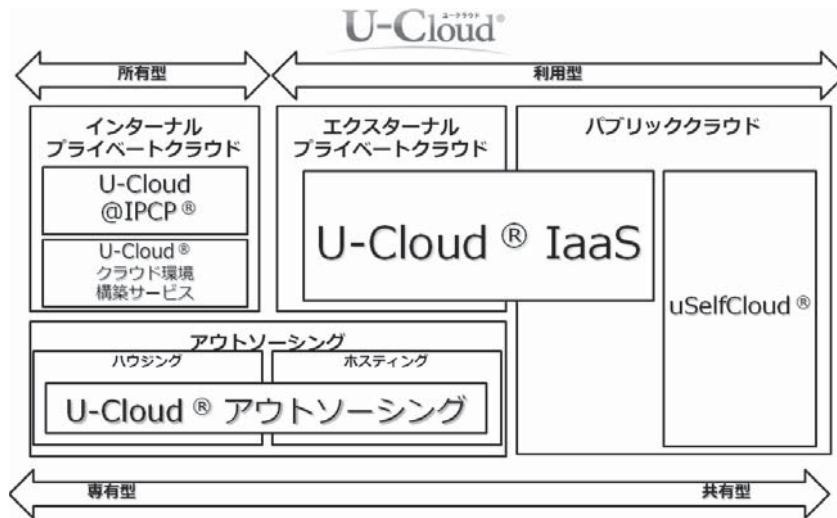


図2 U-Cloudのサービス体系図

企業がシステムをクラウド上に構成するとき、その要件やサービスレベルは様々である。コアとなるサーバ、ストレージ、ネットワーク、そしてOS、インターネット回線、外部接続回線、セキュリティ対策などの基本的な機能拡張、拠点を離れたバックアップやDR 施策などの可用性向上、性能を向上させるための施策など、企業はその業務の特性、ビジネスの特性によって、多くの拡張策を必要としている。U-Cloud IaaS ではそのような企業ニーズに応えるための柔軟性に富んだ豊富なサービスメニューを用意している（図3）。

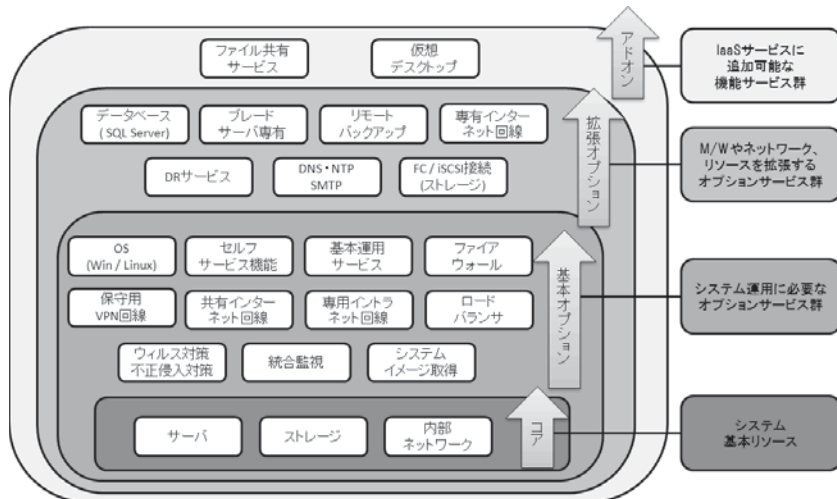


図3 拡張を期待する企業システムのニーズに適した U-Cloud IaaS サービスメニュー

3.2.2 クラウドを活用した ICT 最適化事例

本項では、ICT 最適化のクラウド活用事例をいくつか紹介する。

1) A 自治体での活用事例

A 自治体の救急医療の現場では、患者数の増加、救急病院の数の減少などが原因で、年々、救急車の搬送時間が長くなっているのが課題であった。日本ユニシスはこの課題解決のために、クラウド環境を用いて実現する救急病院と救急車とのリアルタイム情報共有システムを提案した。2010年11月に採用が決定、2011年4月に本番稼働し、課題だった搬送時間が初めて減少に転じた。取り組みからわずか5カ月で運用を開始し、年間の運用コストを約4000万円削減する効果も出している。その提案内容は、救急車には操作性と可搬性の高いタブレット端末を、リアルタイム情報共有システムにはクラウドを、外に出せない情報の共有には既存のデータセンターとクラウドを接続したハイブリッド構成を、というさまざまな解決策の組み合わせであった。

2) ゴルフ用品メーカー B 社での活用事例

新商品発表を3ヶ月後に控え、この短期間に商品専用の顧客管理システムを導入しなければならなかった。日本ユニシスはこの課題解決のために、SaaS型で利用することができ、クラウド環境にデータベースの構築が可能なMicrosoft Dynamics CRM[®]を選択した。B社の要望にあわせたカスタマイズを施しながらも、1.5ヶ月という非常に短期間で顧客管理システムの構築を実現した。

これは、①SaaS環境を用いたシステムの「スピード構築」、②クラウドを利用することで初期コストを低減し、ユーザ数にあわせた従量課金による「コスト最適化」、③クラウドのスケールアウトの特性を生かし、システムの変更や拡張に柔軟に対応する「高い柔軟性」を実現した事例である。

3) 食品事業者 C 社の活用事例

自社の情報発信サイトとして欠かせない「レシピサイト」を、10年以上にわたり自社サーバ上で構築、運用してきた為にレスポンスの低下が顕著になっていた。このレシピサイトを戦略的に活用していくためには、ユーザ数の増加に対応したサーバを低コストかつ柔軟に利用できることが必須であった。C社は、この課題解決のために自社運用からクラウド環境へ移行することを決定した。

それに対して、日本ユニシスは「U-Cloud IaaS」を提案した。数社におけるコンペとなったが、日本国内のデータセンターであること、災害対策としてのデータセンターを用意していること、個人情報漏洩対策機器に対応しているクラウドであること、データセンター運用に対してSLA以上のサービスレベルを維持しようとする思想などが評価され採用に至った。

このクラウド環境への移行によって、運用面の不安は解消され、アクセス集中時のレスポンス低下もなくなり、いつでも快適なアクセス環境が提供できるようになった。C社は300万人の利用を目指して、サイトを成長させていくという。

日本ユニシスのU-Cloudは、単にクラウドの機能をお客様に提供しようとしているのではなく、お客様の課題をお客様と同じ側に立って共に解決していくという志向の下、お客様のICTを最適化するための手段の一つとしてクラウドサービスを使っただけのように設計、構成している。こうした姿勢と考え方、そして技術・サービスメニューによって、お客様の支

持を得る結果となっている。

3.2.3 確かな実績と豊富な経験

日本ユニシスのクラウドサービスは、2008年のサービス開始以来、700社の実績をあげている。適用範囲も図4に示すように多岐に渡り、企業の業務範囲のほとんどをカバーするまでになっている。

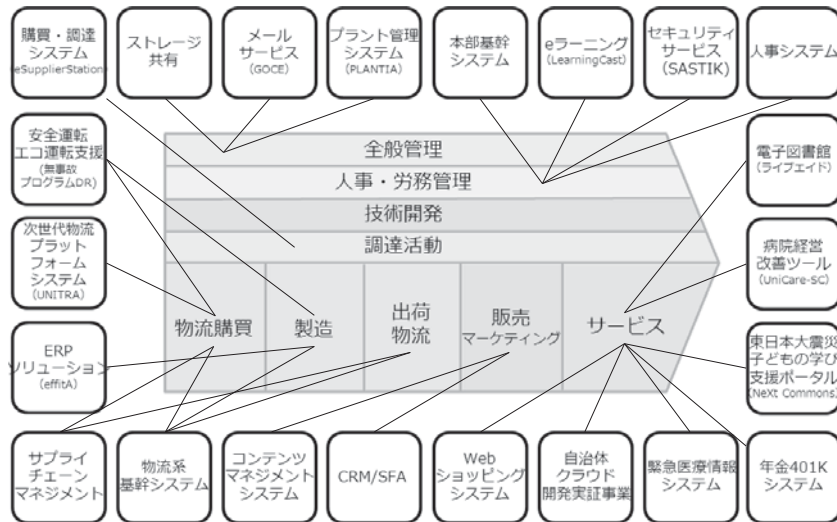


図4 企業の業務範囲全域をカバーする U-Cloud サービスの適用範囲

4. おわりに

日本ユニシスのクラウドサービスは、エンタープライズで利用できるクラウドであることにこだわっている。そのために、クラウドではあまり目にしないようなサービスも実装してきた。これは日本ユニシスが掲げる「ICT最適化」の考えを貫き、お客様が必要とするサービスを提供し続けてきたことに他ならない。クラウドは、お客様から見ればビジネスを成功させるための一手段であり、決してクラウドだけでは課題は解決されない。日本ユニシスは、お客様の側に立ち共に課題を解決していくパートナーとして、今後もお客様が求めるICTサービスを提供し続けていきたい。

執筆者紹介 森 駿 (Shun Mori)

1990年日本ユニシス(株)入社。2008年のクラウド事業立ち上げ時に、クラウド基盤MiFのプロジェクトマネージャーとして参画。以後、U-Cloud IaaSの商品化、マーケティング業務に従事。2013年4月よりユニアデックス(株)にてU-Cloudの事業企画を担当。

